

入中3年人権だよ

徳島市 八万中学校
3年生 第24号
2022年 1月24日
編集・文 吉成正士

新年を迎え、いよいよ進路決定の時期となりました。卒業までも、あとわずか。

進路選択や受検勉強、また友人や先生方との別れに胸がざわついている人もいるかもしれません。ざわつく気持ちも分からないではありませんが、そんなときこそ、これまでの学びが問われてくるというものです。

実力テストが終わるたび、点が下がって落ち込んだり、少し上がってホッとしたりしていませんか。点が上がったたり下がったりするのは当たり前のことです。上がろうが下がろうが、やることに変わりはありません。テストの点数に一喜一憂することなく、やるべきことをやるのみです。気持ちがブレる自分を自制し、視野が狭くなる自分を律し、常に周囲を見渡し、気配りを怠ることなく、一日一日を大事に過ごしている人であってほしいと思います。

先月、最後の学年全体人権学習をしたとき、「力石」の話題が出てきました。昔は人権学習の教科書「わたしの願い」にも掲載されていたのですが、時代の流れとともに消えてしまいました。でも、消えたからといって、出来事そのものの価値が失われるわけではありません。せっかくですから、この機会にみなさんにも読んでいただき、知っておいてほしいなと思います。



「石は語る」

今も、この村に残っているひとかかえもある四個の石の物語です。

昔、日本のあちこちで、武士がざかんにいくさをくり返していた頃、この村の人たちは、たくさん田畑をもち、農作物を作ったり、いくさに使う毛皮の道具や馬のくらを作って生活し、周りの村々とも仲よく幸せに暮らしていました。

やがて、いくさも終わり、世の中が穏やかになると、いくさに使う道具がだいに売れなくなりました。また、幕府や藩の政策により、この村の人々は、住居や職業を自由に選ぶことができなくなり、くらしが厳しくなりました。そればかりでなく、他の村人たちとのつきあいまでも許されず、今まで仲良く助け合っていた人たちからも、のけものにされるようになってきました

江戸時代末期のその村でのできごとです。

大雨の後のたき木拾いは、村の若者の仕事のひとつでした。

その時も、村の腕自慢の若者たちが連れだって、山向こうの川原までたき木拾いに出かけました。

川原に着くと、若者たちは、ざっそくたき木拾いにとりかかりました。「今日は、たくさん流れてきているぞ。」

「これは、大きいぞ。」

若者たちは、競って木を集めました。

「こんだけ集めて持って帰ったらみんなびっくりする

ぞ。」

「ほんま、こんだけ持っていんだら、みんな大喜びじゃ。」

若者たちは、荷作りをすませ、帰りたくをしました。

弁当を食べるのに都合のいい場所を捜しながら、ウキウキと山道に入って行きました。ずっしりと、木の重さが両肩にかかります。村の人たちの喜ぶ顔を思い浮かべながら、一足一足ふみしめながら山道を登っていくと少し入った所に、小さいお宮がありました。

「ここで、弁当にしよう。」

若者たちは、お宮のすみっこにひとかかえほどの石を見つけ、それぞれ、腰をおろし、弁当をひろげました。弁当といっても、イモをふかしただけのそまつな弁当でした。一生懸命働いた後の弁当の味は、ほんとうにおいしかったのです。

一生懸命に働いた満足感と喜ぶ村人たちのことを思うと、話も心もはずんでいました。

しばらくすると、その土地の大人たちがそこを通りかかりました。そして若者たちを見つけ話しかけたのです。

「お前さんらは、この辺りで見かけん顔じゃけんど、どこから来よったんで。」

「ええ、わたしらは、……山向こうの村ですわ。」

「ほう、山向こうの村と言うても、何ちゅう村で……。」

「……へえ。……わしらは、……〇〇村……。」とそこまで言った時、

「ふん、お前ら、ええ度胸しとるのう。」

「ここは、お前らの出入りできる所でないわ。」

若者たちは、初め、その言葉の意味がはっきりわかりませんでした。

「お前ら、どこにすわとんな。」

「へえ、川原で木拾うて、ここでちょっと休ませてもろうとるんです。」

「すぐ帰りますけん。」と、話したとたん、

「お前らのすわった石は、けがらわしいて、ここに置いてけん。すぐ持っていね。」

「はよう持っていなな、ぶち殺すぞ。」と、口々に、大声でののしりました。

ひとかかえもある大きな石です。持ち上がりそうにもないほどの重い石です。大人たちは、それを知って無理に難題を押しつけたのです。

「なんで、わしらだけがこんな目にあわないかんのな。」と、くやしさをじっとこらえていましたがひとりが歯をくいしばり、石を抱え上げました。他の者も、自分のすわっていた石を抱えました。その重さといえば、骨が砕けそうになるほど重かったのです。

若者たちは、必死の思いで山を下りました。あの時のくやしさを、差別に対する腹だたしさを思いながら、歯をくいしばり、体のあちこちがすりむけ、血と汗とほこりにま

みれていました。

若者たちが、必死の思いで運び帰ったものは、村人たちが待っていたたき木ではなく、大きな四個の石だったので。

若者たちは、この日の出来事を村の人々に話しました。若者たちの帰りを心配して集まっていた人たちは、くちびるをかみしめ、若者たちの肩を抱いて、一緒に泣きました。

みんなの涙が、夕日に光っていました。

若者たちの悲しみ、そして、いきどおりをいつまでも忘れないため、この四個の石は、村のまん中に置かれました。そして、いつしか祭りの日には、村の男たちがこの石を使い、かくらべをするようになりました。

石は、部落差別の重みそのもののように重く、若者たちが、

「負けてたまるか。」

「わしらも人間じゃ。」と、歯をくいしばり、大石を空高く差し上げる姿から、差別解放への「ちから石」と、呼ばれるようになり、今も私たちにその差別の厳しさや重い差別をはねのける意思と力を教え続けているのです。



この教材は2006年度の「わたしの願い」までは掲載されていましたが、2007年度からは掲載されなくなりました。しかし掲載されなくなったからといって、その事実や歴史が消えるわけではありません。そのような教材は他にもあります。

「佳代さんの遺書」という資料も、かつて「わたしの願い」に載っていました。部落差別による結婚差別によって若い命を奪われた、徳島市内のある女性のお話です。その命日が、今日1月31日です。

「人の命は地球より重い」と言われることがあります。つらく悔しく、悲しい思いをしたのは命を絶った彼女だけではありません。彼氏も、彼女のご両親も、また彼女のことを知る誰もが、立場や世代を越えて激しく憤り、悲しみました。その事実を語り継ぐことが、部落差別だけでなく、あらゆる差別によって自らの人生を閉ざそうとする人々の教訓になるのです。「次の『佳代さんの遺書』」を防ぐことになるのです。だから、語り継ぐ意味があるのです。

1985年5月8日、ドイツ連邦議会で開かれた第二次世界大戦終戦40周年記念式典で、ドイツ元大統領ヴァイツゼッカーが演説でこう語りかけています。

「5月8日は心に刻むための日であります。……ことにドイツの強制収容所で命を奪われた600万のユダヤ人を思い浮かべます。」

みなさんも学んだように、第二次世界大戦でドイツは、ヒトラー率いるナチス党がヨーロッパを大混乱に陥れました。特にユダヤ人に対する大虐殺、ホロコーストは、みなさんも学習をしたかと思います。

「心に刻みつけられることがなぜかとても重要なのかを理解するため、老幼たがいに助け合わねばなりません。また助け合えるのであります。問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけはあ

りません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」

過去を顧みない者は、同じ過ちを繰り返してしまう危険性があるというのです。だから、大人と子どもが助け合い、心に刻みつけなければならぬというのです。そのことを私たちはしてこられたのでしょうか。私たち教員は皆さんに対してできたのでしょうか。答えは、皆さんの中にしかありません。

過ちを二度とくり返さないためにも、ヴァイツゼッカー元大統領は、ドイツ国民を含めた全世界の人々にこの演説をしました。そして、最後にこう結んでいます。

「若い人たちにお願いしたい。他の人びとに対する敵意や憎悪に駆り立てられることのないようにしていただきたい。たがいに敵対するのではなく、たがいに手を取り合って生きていることを学んでいただきたい。……今日5月8日にさいし、及ぶかぎり真実を直視しようではありませんか。」

人は忘れる生き物です。でも、忘れていいことと、決して忘れてはいけないことがあります。そんなことまで消し去っていいわけがありません。いつまでも大切に語り継いでいく必要があるのです。でないと、同じ過ちをくり返してしまうかもしれないのです。そうならないためにも、私たちは大切なことを心に刻みつづける必要があるのです。

今、みなさんは、自分の進路決定に向けていっぱいいっぱい、周りのことまで気に留める余裕はないかもしれません。また、すでに進路が決まって、のびのびしてる人もいるかもしれません。そんな今だからこそ、敢えて言います。

「こんなときこそ、

本当のやさしさを見失わない人になろう」

しんどいときに自暴自棄になり、自分勝手に振る舞ってしまうのも人間です。周囲に先駆けて進路が決まり、奔放に振る舞ってしまうのも人間です。でも、それを克服しようと、より崇高な生き方ができるのも、また人間です。あなたが、どちらを選ぶかです。

これまでに、たくさんの学びをしてきました。人権学習では、差別や様々な苦難のなかにありながらも、人間としての尊厳を失うことなく、周囲の人々とことんやさしく、そして力強く生きた人々の生き様について学んできました。そんな人たちから、私たちはいったい何を学んだのか。今こそ、そこで得た学びを生かすときが来たのです。自分勝手に振る舞いをしてしまうことは、何も学んでないことになってしまいます。そうではなく、せつかく得た人権学習の学びを生かせるかどうか、いま、私たちに、私たちの教室に問われているのです。進路決定は団体戦。教室の誰一人取り残すことなく、最後までみんなでこの大きな試練を乗り越えていくのです。そこにできるつながりを、「絆」と呼ぶのです。